

2011/03/26

兼子 純

科研費基盤 A :

フィールドワーク方法論の体系化 ―データの取得・管理・分析・流通に関する研究―  
2010 年度の研究報告

□先行研究の探索

- ・「地球学野外調査法」の執筆 担当：分布図の作成 →2011 年 3 月刊行予定
- ・人文地理学における国内主要雑誌，教室発行の地理学関係雑誌，88 誌の 1987 年～2010 年の 6909 論文について，下記の項目を雑誌ごとにエクセルファイルに集約。  
項目：執筆者，発行年，論文題目，雑誌名，巻，号，頁，執筆者ローマ字表記，英文タイトル，  
原稿の種類，方法論，対象地域
- ・地域調査報告・地域研究年報（地誌学）の土地利用調査項目と地区の分析

□取得データと地図・衛星画像・統計との統合

研究課題：

「都市の土地利用図作成におけるデータベースの構築 ―大学院の野外実験の実践を通じて―」  
地域研究年報 33, 213-221. 共著者：杉野弘明・大石貴之

研究目的：

大学・大学院の野外実習において実施される都市的土地利用調査について，筑波大学大学院地誌学野外実験の実践を事例として，継続的な活用を可能にする土地利用データベースの作成手順を示すとともに，土地利用調査の活用方法を検討する。

キーワード：土地利用図，土地利用調査，基盤地図情報，データベース，須坂市

研究背景：

地誌学分野では，近年長野県を中心に野外実験を実施してきた。中でも製糸都市として発展してきた須坂市は 2002 年度と 08 年度の 2 回にわたり野外調査の対象となり，大橋ほか（2003），亀川ほか（2009）の成果を得ている。09-10 年度は須坂市誌編さんの調査協力依頼を得たため，例年以上の研究成果を得ることが可能となった。

しかしこれまでの研究成果では，一つの報告書を作成することを目的としていたため，それぞれが貴重な研究成果を挙げてきたものの，必ずしも今回の調査の成果と結びついていないという問題がある。また，2009 年度は都市中心部をフィールドとして 3 グループ 11 人が調査に携わったが，同じ都市中心部というフィールドを対象としていながらも，各グループで得た調査結果や地図・統計情報などが共有されていない。

そこで今回，都市中心部をフィールドとした土地利用調査をもとに作成する土地利用図を電子データベース化し，共通した地図基盤を作成することとした。具体的な手順は下記の通りである。

5 月：現地調査

6 月：都市計画基本図への着色，宮坂先生へ作図依頼

- 6月：土地利用図の電子データ化：国土地理院基盤地図情報・縮尺2500を利用。作業説明。
- 8月：完成したshapeファイルをもとに、各グループでの作図作業(aiファイルへの書き出し)
- 9月～10月：作業結果を分析，考察
- 11月～：報告書の作成，継続可能なデータの整理・管理・保管方法の検討
- 2月：地域研究年報の刊行
- 3月：調査資料の整理とラベリング，データの保管・管理方法の検討，レイヤーの追加

**ねらい：**

- ・これまで個別に収集してきた統計・地図データを，共通の電子地図データ上で管理することにより，将来同じ地域で調査した際の比較・検討を可能にする。
- ・同じ地域（都市中心部）で個別に調査した各グループが，共通の地図データ基盤上で作業することにより，問題意識を共有するとともに，それぞれの調査項目を他グループの調査成果から補完する。
- ・特に修士課程の大学院生において，調査した内容をGIS上およびイラストレーター上で作業する手順を習得させる。

**効果：**

以上の作業によるポイントは，次の通りである。第1に，これまで数回にわたり同じフィールドで個別に作業していた各種データが，将来的に比較可能になることである。第2に，特に修士課程の学生にとって，フィールドワークの成果をGISやイラストレーターによる作図と関連づける能力を習得できることである。将来的には撮影した写真に位置情報などを付加すれば，撮影地点での景観比較などに活用できるであろう。

今後の課題として，作成したデータの保管方法，ラベリングの問題がある。現在作業中のデータは，人文地理学・地誌学分野のハードディスクに保管・共有化する予定。

**今後の作業：**

- ・調査資料の整理とラベリング，データの保管・管理方法の検討
- ・レイヤーの追加（現在土地利用図データのみ，町丁界，旧町丁界，統計区，各グループの調査データなど追加予定）

**□2011年度の予定**

- ・人文地理学・地誌学実験（地球学類）での取得データと地図・統計との統合  
→フィールド予定地：天久保2，3丁目
- ・大学院地誌学野外実験  
→調査地未定